

2023年 6月 30日

実践女子大学・実践女子大学短期大学部
教員研修 実施報告書 (Web 公開用)

1. 所属	人間社会学部 人間社会学科
2. 職名・氏名	教授・高橋美和
3. 研修期間	2022年 4月 1日 ～ 2023年 3月 31日
4. 研修先機関 (国名)	王立プノンペン大学 (カンボジア王国)
5. 研修課題名	上座部仏教徒社会におけるエイジングの研究
6. 研修経過	<p>研修期間、王立プノンペン大学開発学部に籍を置いた。前半は①クメール語ブラッシュアップ、②大学生居住世帯や若者のキャリア意識とジェンダーに関する聞き取り、③後半実施予定の農村世帯サーベいの準備、後半は①農村世帯サーベいの実施、②共著本の分担章執筆に当てた。クメール語で書かれたカンボジア人女性の自伝の翻訳作業を並行して進めたが、これは研修期間で未完となった。(帰国後完成させ、出版したいと考えている。) また、1年を通して、できるかぎりの仏教行事・年中行事・実践儀礼の参与観察に努めた。</p> <p>4月：■華人系クメール人の清明節の参与観察。■カンボジア正月の参与観察。■王立プノンペン大学外国語学部の外国人のためのクメール語コースを受講開始 (～9月)。</p> <p>5月：■複数州を訪問・検討後、過去に調査したタケオ州の一農村を再調査することに決定。調査予定村の村長を表敬訪問、調査の内諾を得る。■カンボジア人女性の自伝、チア・ワンナート著『人生の歩み』(クメール語)の翻訳開始。</p> <p>6月：■タケオ州調査予定村の予備調査1回目。■王立プノンペン大学学生の居住世帯に関するアンケート調査の調査項目の検討、および実施(断続的に～8月)。■仏教僧侶出家式の観察</p> <p>7月：■男子学生のキャリア意識に関する聞き取り(僧侶学生・元僧侶) ■仏教行事「入り安居」の参与観察。■高齢の女性修行者に聞き取り調査。</p> <p>8月：■女子学生・大卒者のキャリア意識に関する聞き取り。■大学生の居住世帯に関するアンケート調査の集計作業。</p> <p>9月：◇老親訪問のため一時帰国。■仏教行事プチュム・バン(カンボジアの「盂蘭盆会」に相当)の参与観察。■クメール語コースのレベルIV(最上級)修了証受領。</p> <p>9月下旬～10月上旬：■タケオ州調査村の予備調査2回目。</p>

	<p>10月：■タケオ州調査村世帯サーベイの準備（住宅地図、記入用世帯票、世帯票記入の手引きの作成等）。調査員を務める学生を集めて説明会実施。■調査村近くに調査員と合宿、世帯サーベイの実施。■年中行事オム・トゥーク（競漕祭）の観察</p> <p>11月：■仏教行事カタン（僧衣献上祭）の参与観察。行事の担い手としての高齢者の役割を調査。■タケオ州調査村の補足調査1回目（高齢者を含む貧困世帯での聞き取り）。調査村のデータ入力、フィールドノート入力、データ集計作業等。■分担執筆本②（下枠参照）の初稿執筆（～2023年2月）。</p> <p>12月：■タケオ州の結婚式の参与観察。■分担執筆本①改訂のため宗教にて資料集め。</p> <p>2023年1月：■分担執筆本①の原稿改訂、終了。</p> <p>2月：■タケオ州調査村の補足調査2回目（高齢者のための村内相互扶助慣行に関する聞き取り）。■この補足調査結果に基づき、分担執筆本②の加筆修正。</p> <p>2月下旬～3月：■プノンペン市にて結婚式の参与観察2回。◇コロナ感染により休養。完治後、帰国。</p>
<p>7. 本研修で得られた成果等（論文・学会発表含む）</p>	<p>以下の書籍の分担執筆を行った。</p> <p>①上田広美・岡田知子・福富友子編 2023『カンボジアを知るための60章 [第3版]』明石書店／担当箇所：第11、12、13、15、16、17章、コラム6</p> <p>②小林知編 近刊『カンボジアは変わったか』めこん／担当箇所：第8章「少子高齢化を迎えたカンボジアの家族・世帯」、コラム「結婚式に見るカンボジアの家族・親族のつながり」</p>
<p>8. 所感</p>	<p>長期滞在のおかげで、まず、公用語クメール語の運用能力を高めることができた。そして、1年間の季節と行事のサイクルを体感しつつ、カンボジア人の暮らしの様々な局面をじっくりと観察し、かつ、その多くに参加することができた。</p> <p>かつての調査村の人々と再会し、再調査を実施できたことは大きな喜びであった。人口移動、若者のライフコースとジェンダー、家族・世帯、高齢者の役割とケアの担い手等における、この22年間の持続と変容について多くの発見があった。調査の実施にあたっては王立プノンペン大学開発学部の先生方から多くの助言を得た。また、調査員を務めてくれた同学部の学生たちとの協働からも多くを学んだ。</p> <p>この1年の経験を、今後の研究活動にはもちろんのこと、本学での教育活動にも存分に生かしていきたいと考えている。</p>